

## インタビューの中の対話と独話

### － 保田染五郎の談話の分析 －

伊 賀 光 屋

「あなたはお酒が好きですか。甘いものは好きですか。おしゃべりですか。・・・そうでしょう。それに獣偏がつく。獣偏に王（狂）ね。椿の好きな人はみんな同じなんです。」

彼は椿樹園を訪れる新参者に必ずこの口上で切り出すものだった。それから彼の巧みな話術によって蟻たちは椿道という蟻地獄に吸い寄せられていく。

身の丈六尺ちかく、黒々とした長髪をオールバックに靡かせ、太い眉と端正な顔立ちで愛について語る、この男を初めのうちは誰もが越後の土佐源氏（宮本常一、1981）と思うだろう。ある時、安田郵便局に住所不記載の「保田染五郎様」と書かれた小包が届いた。局員は直ちに彼のことに違いないと、その小包を彼の所に届けたという。そこで、ここで私は彼のことを「保田染五郎」と表記しておこう。

椿樹園から臨む菅名岳はまことに美しい。春の木に花咲く頃、阿賀野川右岸の堤防越しに薄らと残雪をかぶったその山塊から冷たい風が吹き抜ける。鮮やかな赤の大紋りの京牡丹が隣の圃場に咲き乱れている。彼は従業員と丁々発止のかけ声で、掘り上げたロイヤルベルベットに根巻きを施している。40～50kgはあろうというその椿の成木を一輪車に乗せ私の車まで運ぶ。そして「一息ついてから」と一服して休む姿を見て、ああやはり齢70になんなんとするのだと気づかされる。

はじめて彼の椿を手にしたのは今から25年以上前のことだ。羽衣、絵巻、匂い覆輪、五色八重散椿、ベティーズ・ビューティーこれらの挿木2年苗を通販で購入したものが今ではすでにかかなりの大きさになっている。その頃、もちろん彼に面識はなかった。その後今から10年ほど前に、車で椿樹園に行き天目を買ったときにも彼は不在で、従業員から購入した。数年前に裏庭を広げたのを機会に、再び椿樹園を訪れ、初めて染五郎氏に直面した。といっても、インターネットや新聞記事で彼の風貌は知っていたので、他人のような気はしなかった。私にもやはり先の口上で切り出し、妻が美しいと盛んに誉める。私には声がいいとおべっかを言う。その時は、彩霞、関戸太郎庵、慈光寺、大谷の勾玉、赤西王母、岩の原などを入手した。今までで出会ったこともないけったさにたまげたが、家に帰るとまた行って話を聞きたくなる不思議な魅力が染五郎にはあった。

それからまた、数日後に出向いては加茂覆輪と銀閣寺赤藪の成木と婆の木、白覆輪羽衣、出雲大社赤藪、志田わらべの挿木苗を手に入れた。ここから私の椿樹園参りが始まったのだ。それから春4月初旬と秋10月初旬にもう何度となく椿樹園を訪れ、彼との間で対話的インタビューを繰り返した。テーマを設定しない方式ではあるが、両者の共通の関心事は椿のことであるから、何時の場合にも椿とその周辺の話に収斂していく。本稿は、かれとのインタビュー・データから、対話原理のいくつかを例示する件について方法論的な考察を加えてみたい。

#### I 対話主義の原理

対話主義 (dialogism) とは、一言で言うと、言語学、心理学、社会学、文化人類学などに見られる、事物の实在を前提としながら、経験的意味が対話という相互行為の中で構築されるとする、知識論の新しいパラ

ダイムである。

すなわち、①事物（身体、自然、世界、社会的制約など）の存在を否定しないが、それらについての意味は対話の中で構築され、対話の中で流用され合い、対話の中で承認されると主張し、②対話の中の談話（discourse：複数の発話からなる結束性のある纏まり）を自律的な話者たちの間で交互になされるモノローグとしてではなく、参加者たちの言葉や身振りを通した相互依存的やりとり（相互行為）と見なし、③発話はその文脈（対話、共通文、状況、活動の型、会話者たちのそれまでのやりとりの経歴、用いられる言語、世界の分節化の様式＝共通知識の収蔵体、時代的に制約された思考方法など）に依存しているが、逆に発話は文脈を再生し、修正し、巧緻化していくとする、知識論である（Linell, 2003）。

対話主義の基本的な考え方は、F. Rosenzweig（1921）やM. Buber（1962）などの新カント派哲学者たちのコミュニケーションにおける**共著性（the relation of co-authors in communication）**という考え方である。すなわち、人々は対話の中で共に良く理解し合った我・汝関係に立って自らの生活経験、情緒、関心、そして社会的リアリティを共同的に創作するというのだ。この考え方は、我・汝関係を互いに理解し合えない異質の複数の声（**多声性：polyphony**）に置き換えるかたちで修正されてM. Bakhtin（1963, 1976）に受け継がれた。こうした伝統的な対話主義にたいして、現代の対話主義は**社会的表象の理論**の名の下に**社会的知識が対話関係の中で構築される**という主張をしている。そして、他者の中に自己を埋没させ、他者の視点で世界を見る、純粋な共感のもとでは対話は生まれえないという。対話には**能動的な共感（active empathizing）**が必要であり、ここでは他者と意見が戦わされ、自己は他者の中の見慣れぬものについて、自分の意見を押しつけたり、それを自分の思考や発言の一部として**流用（appropriation）**することで、我がものにしようとする。こうした自己と他者との緊張関係の中で、相互に相手の中に見慣れぬものを体験し、自分の見慣れた方に引き寄せたり、相手の見慣れたものに慣らされるといった意味を巡る戦いを繰り返すことこそ、対話の本質的な部分であるというのだ（I. Marková, 2003）。

このように、人間はコミュニケーションする存在であり、自分とは異質な見慣れぬ他者と互いの考えを戦い合わせ、相手を屈服するか、自分が屈服されるか、はたまた双方にとって新たな考え方に到達するかしながら、共著者として、世界と社会的リアリティを創造し、体験を共同で編集する。

対話の中で、ある発話（speech）が他の発話に依存して一つの纏まり（結束性）をもった談話になるようにさせるものは**話題（topic）**である。それぞれ別々の認知構造（世界の分節化）をもった多くの声が、対話を成立させるためには、焦点が必要である。その焦点こそ話題に他ならない。話題が明確であるからこそ、それぞれの発話（utterance）や発話（speech）を一つの結束性のあるものにしたり、あるいは一つの争点を巡って論争したり、はたまたその争点を巡るある話者の発話に対して対話相手が沈黙で応じるようになったりする。そして、いくつかの話題が纏まりを持つ場合には、それは**テーマ（theme）**となる。

話題が意識されることによって、人々の発話や発話とその纏まりである談話は、それぞれ応答的となり、対話という進行的な連鎖が生じる。

話題は一方で予め与えられ、当たり前とされた象徴的宇宙（社会制度、組織、確立された社会的言説）を再生する働きがある。他方で、持続的探求の開始のきっかけしか与えられず、話題自体は会話の進行の中で徐々に姿を現し、あるいは最後まで何を話題とした対話であるのかが判然としない場合もある。

対話者たちが共通のテーマについて語り合えるためには、対話者たちは少なくとも一定部分は共通した認識構造、世界の分節化の仕方を共有していなければならない。そうでないと、当たり前とされる象徴的宇宙を繰り返し再現することが不可能であるだけでなく、新たなリアリティを構築し、現実を創造することも不可能になる。かといって、対話者双方が完全に認識構造を共有している場合には、すなわち同じ認識の共同体のメンバー間で会話が行われる場合には、理解に基づく**語る必要無き沈黙（M. Buber, 1962）**か、当たり前とされる象徴的宇宙の再生産的発話のみが存在し、新たなリアリティの構築は生じない。また、全く異なる認識構造を有する話者同士の間では同じ母国語を用いていても、対話の成立は不可能で、理解出来ないことによる**語る意志無き沈黙（V. Crapanzano, 1990; Z. Gurevitch, 1988）**か、互いのモノローグのぶつけ合いしか見られず、ここでも新たなリアリティは構築されない。このように、対話が成立するためには、対話相手は一部では良く知り合っている汝であり、一部では見慣れぬ異質の他者で無ければならない。こうした関係を対話性（対話状態：dialogicality）という。

## II 流用によるリアリティ構築の収斂

まず、インタビューの中で対話が成立している談話の実例を挙げてみよう。そして、対話という相互行為の中で、リアリティがどのように構築されるのかについてみていこう。リアリティを共同で構築するために日常的に用いられる方法としては、流用がある。流用とは、対話者の一方が経験を編集するために用いた文脈指示的な言葉を、それを聞いた対話の相手方も自分が前から使っていたかのように用いて、同じように経験を編集することである。具体的な例を、私と保田染五郎との対話の中から上げてみよう。

( ) は私の発言、地の文は保田染五郎の発言、「 」は染五郎の妻の発言である。また『 』は染五郎の発言の中に現れた染五郎や萩屋先生およびその妻の発言を表している。

### 談話例 (1)

(椿の園芸家というのは日本ではどのくらいいるの、小さいところも入れれば山のようにいるんだろうけど)  
 だいたい椿専門でやってる、椿、久留米  
 (久留米ツツでしょ)  
 だけどツツだけでは駄目だから椿やってんですよ  
 (カタログだしてますよね)  
 久留米ツツ生産組合ね  
 (あれは苗ばっかしなんでしょ)  
 苗も、おおきなのもあんだけど、カタログでは小さいの載せてるわね。あと熊本に二軒くらいある。熊本、肥後椿ね。  
 (ああ、そうかそうか、そっち)  
 西村晃華園と太田椿寿園、だから九州で十社ぐらいある、あと昔は兵庫県の宝塚が植木の産地だったけど  
 (あ、そうなの)  
 あそこは今ベッドタウン、京都  
 (都市部だもんね)  
 もう椿なんか作っておっかアパート建てた方が良い、  
 (うんうん)  
 で、そこが産地てのは動くんですよ昔から、それで今は名古屋稲沢周辺ね  
 (稲沢、どこですか)  
 知多半島のあの辺  
 (それあれですか、三河系の)  
 そう、そこは十人くらいいるのかなあ  
 「へったねい」  
 うん、へった、それからこんどは東京は減って、なくなって埼玉、  
 (埼玉)  
 一部ねあの鴻巣周辺  
 (あれでしょ、高崎から、八高線 {正しくは高崎線} の方でしょ)  
 八高線の方、あの辺とあと新潟  
 (新潟はでも椿樹園だけでしょ、まだいるの)  
 私と一三四人くらい、量はウチ日本で一番、品種も  
 (新潟でほかにどこ)  
 ウチと長尾草生園  
 (それどこ)  
 小合、秋葉区  
 (小合、秋葉の、それ椿専門?)

いろいろ、それから丸山新花園（南区中山：臼井）  
 （それはどこ）  
 それは臼井  
 （臼井たら川の向こうだ）  
 川の向こうだ、  
 「田辺さん」  
 それから田辺さんいるし、  
 （それはどこ）  
 「おなじ丸山さんの近くです」  
 もうちょっと今度、新津のあの辺  
 「早口さん」  
 早口さん  
 「あの人たちは他のもしてる」  
 （ああ）  
 新潟で十人いるかんあ  
 （新津はどこでやってんですか）  
 小須戸と小合  
 （じゃあみんなあの辺なんですね）  
 昔から園芸の産地だった、だから私たち  
 （椿専門の人はいないんでしょ）  
 日本全部でも椿専門てのは十何軒もないでしょ、  
 （あそこは、岡山の）  
 笹井さん、あの方は基本的にはそんなにいっぱい作ってない、通信販売で  
 （あそこのカタログをもらったんだけどねい、あそこ写真写ってんですよ、山にいっぱい植わってるみたいになったんだ。私 google で見たのね、）  
 ハイ  
 （もう団地になっててねい、）  
 えい  
 （椿畑がないよ）  
 ああ、  
 「あ～あ」  
 （だからどうやって作ってんのかな）  
 あのウチらみたいにおおしもしないから、大量生産しないわけ  
 （じゃあ愛好者に）  
 愛好者にだけ、  
 （あの方は）  
 京都に山口さんもいるしね、  
 （その人分らない、吉川さんているでしょう、）  
 吉川和男  
 （あの人何者）  
 あの方は医者  
 （医者なのか、じゃあ趣味でやってんの）  
 趣味で、道楽で交配して新しいの作ってんの a、  
 （あ～あ、次から次にへんてこりんなの作ってる、）  
 そうそうそう、  
 「はははは、へんてこりんだって・・・」

(椿の方は、やっぱりやってなかったりしてでしょ、倒産でもしたの)

ああ、それはねい、お医者さんだから、自分で交配して、それで品種を朝妻さんていってね、東和園芸会社に任せちゃって、

(ああ、)

パテント料をとってんの、

(じゃあその吉川さんは品種改良みたいなことをやって、業者はまた別にいる)

東和園芸がやっているわけ、

(例の図鑑みると、吉川さんて、なんだサザンカと椿の交配みたいなものやってるでしょ、)

いろんな種間雑種てのを作ってる、日本の椿はヤブツバキと雪椿でしょ、それでも種間雑種なんだけれども、こんどあの人やっているのはベトナムの椿と日本の椿とか、いろいろ原種があるわけ、それをクロスして、ところがねい、どうしてなんでしょ、やっぱり学者さんは、萩屋先生も、新潟大学の農学部の萩屋先生もそうだったけど、どうしても学者さんは世界でまだ誰もこれとこれの種間雑種を作っていないことに重点を置くのね b、

(あ～あ、ねい)

で、『保田さん』

(良い花いうかそういうんじゃないで、)

『世界誰もやらん』

(そりゃ分かる、そういう世界だわ、はははは)

だから、俺んところ持ってきて、スライドどっさり持ってきて、『保田さん売れる順番から並べてください』って言う、

(ああ)

先生は自分で売れるものを、上位にあるのはみな種間雑種で世界で誰もやっていないもの。だあ、私は見て

(うん)

人間の女性と同じだ、

(そうだ)

なんて綺麗な人なんだって、

(お客さんが喜ぶやつをね、)

だから、萩屋先生は、その花は綺麗だ関係ない。

(それ結局、難しかったとか、どうだこういうの出来るだろうって、自慢みたいな)

ああ、そう。卒論となんていうかなあ、学者の論文みたいなもんよ。その論文的の世界の中で、誰もやらんことをやったって、価値観はあるけれども c、・・・

(お医者さんだって、ほら、なに、病気を治す新し方法とか研究ばっかしやってる人と、それから患者さんの命を助ける人がいる。それと同じ、)

同じだ。

「あ～あ、そうかそうか」

だから萩屋先生が持ってくると、私また売れるのと、先生と逆転する訳よ、すると奥さんがそばにいて、『お父さん、あなたと保田さんの見目が違って、だから保田さんどうしてこれ売れないと思う』、『先生例えば〇〇と△△△の息子が一緒になったから、由緒が良いからって売れるもんでない、確実に綺麗な、いい女であるかどうかでもんだいだって』、

(はははは)

『いや～』、て言うんだよ。

(そりゃそうだ、分かる)

私らは、好かれる人を作らなきゃならない、ただ〇〇〇〇の孫とかでは困るんだ、

(この前、保田さんがおっしゃってた、あのほら・・・あの、農林省の登録品種あるじゃない)

ええ

(あれやらないで話聞いたとき、ピ〜んときた。そうか、やっぱりお客さんの方を見て、ホントに好まれるのは何か)

そう、

(それを商品化することに、あの〜、頭使ったと)

私の表紙に載ってるの、全部パテント取らねいのよ、

(なるほど)

ウチから仕入れて増やして儲かる人もいる、

(こっちも儲かるんだ、)

こっちも儲かる、

(流行らして、)

こういう風にパテント取ると、私以外、あるいは私が認定した生産者以外作れないことになる、と量的に限度になるから、う〜ん逆にみんな売っちゃって増やして売る人も儲ければいいでしょ、

(プロデューサーだよわい ①)

ああ、

(あのほら、あの歌手の世界だって)

ええ、

(うまい人でいうよりも、いかに、次から次に出てくるタレントの中で)

ええ、

(大スター作るかっていう、そういう考え方だよ)

あの、結局私たちのやっていることはプロダクションですよ ②、

(そうですね)

歌手を育てるプロダクション、だから、プロダクションはプロダクションに徹しないと

(うん)、

ただ

(保田さんの考え方分かる)

学者のわい、だから萩屋先生、『なんで僕の品種、保田さん買ってくんない』 d

(分かる)

『先生のは売れない』 e

(うん、そう学者の世界、そういうの分からない)

売れない

(そういうの全然分からない)

『どうして先生、綺麗だ』 f

(私もそうだけれどもね)

『綺麗なものを作ってくんないの』、て、『うな、これ珍しいんですよ、沖縄品種の原種とジャポニカをこういう風に』、『先生沖縄品種とジャポニカこうしたって大して綺麗じゃないよ、これをホントにマニアが欲しい、好きな人が綺麗だって言って欲しがるか、私は欲しがるか欲しがらないかで線引くんだって、これとこれは世界で無いんだなっていったって、見て綺麗じゃなければ駄目だ。』『いや〜』て萩屋先生言うのよ、  
『先生売れるか売れないかだて』 g

(それわい、)

人気を呼ぶか呼ばないか、

(萩屋さんのさあ、そういう気持ち)

分かるでしょ

(ていうのは、私そういう世界だは、でしょ)

ええ、

(だから逆に、保田さんとお会いしてわい、色々話聞いてて、はあこういう考え方があるんだ、てわい目がわい)

そう、  
 (目から鱗)  
 自分ではそんな意識はねいんだけど、ただおれのいとこに  
 (うん)

上の例で、私が染五郎の園芸活動を下線①のように**プロデューサー**として特徴付けたのを承けて、染五郎は自らの役割を下線②のように**プロダクション**として表現している。こうした対話の中でそれぞれの経験を編集するときに、相手の用いた言葉を流用することで、共著者になることがある。さらにこのキーワードは、椿の生産に携わる二つの役割、すなわち人工交配による新品種の作出と新品種の商品化と、を区別している染五郎のそれ以前の発言（下線 a, b, c）によって既に語られた文脈に沿って私が言い出したものに過ぎないことも明らかである。染五郎が語りによって分節化した経験的世界を私がそれを表す象徴的な言葉で編集し、染五郎はその言葉を流用することで、私と染五郎はこのリアリティを共同で作成したことになる。そしてこのキーワードがその後の文脈展開の流れ（下線 d, e, f, g）を収斂させるインデックスとなっている。こうして対話というリフレクシヴな相互行為の中で**プロデューサーとしての園芸業者**という話題が現れ、リアリティとして構築される。

### III 独話に対する語る意志無き沈黙での応答

前節で挙げた発話例（下線 g）の部分で、それまで丁々発止で染五郎の発話に間髪入れず応答していた私が、数十秒間にわたって沈黙しているが、この沈黙は語る必要のない理解と同意を示す沈黙である。しかし、沈黙には理解出来ないことによる語る意志無き沈黙もある。次の談話の例では、ほとんど染五郎のモノローグが現れ、とりわけそれまで五葉松について色々と言っていた信太が全く沈黙し、この対話状況に参加していた私と信太の妻千春が双方を取りなそうと色々腐心している、そうした対話状態がみられる。

なお、地の文は染五郎、( ) は私、「 」は信太、『 』信太妻千春の発言である。また、罫線で囲った部分は染五郎が電話相手に語っている部分を表している。

#### 談話例 (2)

忙しくなったのよ、家の女房の誕生日だから是非一つきちんとしてくれと、  
 (うん)  
 ただ布をこういんじゃないくて、箱に入れてきちんと結びで良い案配にして、そしてそのご夫婦の名前を筆で書いて  
 (ほおお)  
 あの、旦那さんの名前は、下の名前  
 「えあの私、信太です。」  
 信太、奥さんは  
 『千春です』  
 千春、忍(しの)ぶ思いもはるかなり、んで始まる言葉はないから、たで、楽(たの)し嬉(たの)しの人生は、  
 でしんたになるでしょ。ちはる、千鳥(ちどり)しばなく故郷の 小川のほとりを  
 (うははは)  
 二人して、でち、ともあればこそ人生の  
 (うふふふ)  
 で、ちど  
 『千春です』  
 千鳥しばなく故郷の小川のほとりを、二人寄り添い花小道、でち  
 『千春です』  
 で遙か(はるか) 夢見る二人の先は、瑠色(るりいろ)アザミと戯れて

(うははは)

この道二人の花旅路, で, しんたちはるになるでしょ。そこへ俺の落款を押して, で布を『歌と共に』

入れて, 箱にきちんと作って。

これも俺の遊び,

『すごいですね』

なんでも60秒で書くことにしている。

(ひゃははは)

一日も三日もかかるなら間に合わねいもんね。

(はははは, こういう才能がある)

旦那さんは, 真面目で良い方でしょう, 見た瞬間ねい真面目は良いことなんで, そいであなたは知性であふれ出る方だ, 声も綺麗だ, アゲマンの人だなどと思ってんのよ。アゲマンてのは変な意味じゃねいのよ h。分かるでしょ。そいで良いご夫婦だなどと思って, 言葉を瞬時に考えて

『すごいなあ』

だからこれも遊びで, 最初はね, 割烹の女将, 女将良さそうだなと, で行って恋文を書くのよ, 恋文って書いて, あなたさまとお会いしたのも何年ぶりでしょう, あなたのすてきな声が, 忘れられず, 今宵飲みに参りました。またすてきなお声で, 花の話を語ってくださいませ, そいで半分書くでしょ, で女将に筆とかえて

(うふふふ)

で女将, 保田さんほんとに, 一種の恋文よ, 合作の恋文よね。江戸時代に流行ったことよ, 今スカートの短いコンパニオンに戯れるのは, 男のあれ良いと思ってとも, あんな遊びは靴底三寸の遊びで, 触るなんて植草先生みたいにやたらに触るのは靴底三寸, 9センチの高さで遊びでは一番質が悪いの

『うん』

だから最高の遊び無限にちかい遊びは, ならば何だって言うと, この方と滅多に会えないから, 新潟大学の先生なのよ, この方と滅多に会えないから, たとえ10秒でもこの方と会話した胸に熱い思いが流れる瞬間あれが無限にちかい遊びなのよ。

『ああ〜』

遊びって定義はないんですよ, ないけれど, そこにまた奥深さがある分けよ, 遊びってのは。植草先生みたいに大阪商科大の教授棒に振って電車の中で女性の了解も得ないで尻を触るなんて, ほんとに, 男はみんなホントは触りたいのよ,

『う〜ん, うふふ, でもこう楽しみながら遊んだ方が』

だから, 信頼感があれば別に肩触ったりはいいのよね。お互いに信頼感, やたら電車ん中ではちょっと問題なっちゃう, 痴漢なっちゃう。あれで植草先生大学の月給パーにしちゃたんだもん, 奥さんと子どもさんかわいそうなんさ, だからああいう先生俺みたいのと飲んでれば,

(はははは)

だから高校大学優秀で大学の先生になったと思う, 俺みたいのとあの女いい女だなあといえる仲間が必要なのよ, あなた女性なのに大変失礼だけれど

(いいえ)

そういう仲間が思春期から成熟期までは35か40ぐらいまでは必要なんですよ男友達が,

[リンリンリン]

(鳴ってるよ)

あの人にはあんまり男の友達ねかったんだな, やっぱり友達よ, 友達もたねいばだめよね

[リンリンリン]



はい椿樹園です、ええ、ご住所おっしゃってください。はいちょっと待ってね、郵便番号は、はい、東京都・・・

「農学部なんですか。」

(うらん教育学部なの)

「そうなんですか、こういう(椿)の好きなんですか」

(それは好きだけど、この人が好きなの、はははは)

「ああそうですか、俺の親父も新大で」

富士見町行った私の友達いて、いまどんななつたろねい

(はあ)

『一正蒲鉾』

(ふーん)

富士見町一の三十三のヴィーナス立川

「私の同級生もね教育学部出て今どこにいるんだろう、証券会社いってますよ」

『お世話になって』

お名前は

(これから農園を経営するんですか)

「そうですね」

『そうなの、初めて聞いた』

鍋島ね、倉庫の蔵、難しい蔵ですか簡単な倉ですか、その倉ですか

(この人の周りに好きだっていっていっぱい人がやってくる)

「盆栽をやりたいんです」

『盆栽の』

山左右人のような字を書いて、ああはい、ウ冠に草冠に見るね、

(椿の盆栽なら長尾さんて人がいてしょっちゅう畑に勝手に入って、切って持って、盆栽にする)

明治の治ですか、治めるね

(新潟の人みたいだよ、後で聞いてみ)

はい明日明後日かな、宅急便だからね

(ちっちゃな花だとさ、大きな木でも盆栽に向くでしょ)

「そうですね」

(ねえ長尾先生いつも来る、盆栽の)

新潟の

(盆栽知りたいって、盆栽やってんだって)

あんあん、いま住所ここで分からない、年中来る人だから

(しょっちゅう来てれば顔逢わせるよ)

「長尾さん、長尾草生園」

長尾草生園じゃなくて、秋葉町に住んでるんだ

(秋葉区)

新潟市秋葉

(ああ秋葉町、うんうん分かる、山の下の方)

山の下、あそこで大きなスーパーあるでしょ

(原信)

その近くだ

(はあー)

『あれしんちゃんの原信』

「違います」

『あれ違う』

奥さん、あなたその綺麗な声と i

『うふーん、ありがとうございます』

ごめんなさいね、綺麗な声を出す練習は j

(誰にでも言うから大丈夫、ははは k)

おいでになったら誰でも戯れると思ってください、でもその綺麗な声は練習して出ているんですか、それとも l

(地声でしょう)

地声か

『練習なんてしたことないです、普通に鼻歌歌ってる、ね』

「そうそう」

今よりもっと素敵の人になりたかったら、今夜から風呂に入る、入り方を変えないと

『風呂の入り方』

風呂へ入って、13分鏡に向かって千春あなたの眼差し素敵ね、鼻もほどよい高さでよいわね、口元はとくに良いわよって誉めんのよ、自分を

(ふふふふ)

その音階で、ハ長調のソ、ドレミファソハ長調のソ、それで例えばうんと名前なんだっけ m,

「信太」

『信太』

信太さん↑て、おはよう信太さん↑てこれが正しい挨拶よ、語尾ふっと上げて、

『そうかそうか』

語尾上げるのは何故かと言うと、語尾を保田さん↑、伊賀先生↑って言うのが正しい呼び方、

『ふ〜ん』

ソの音階でね、そいでその語尾

『そうだね』

で語尾上げるのは愛してるよ、尊敬してるよ、大好き、みんな言ったのと同じことなの、それ語尾下げて信太さん↓、あなた帰ってたのね↓、

(うははは)

入れ歯が外れたみたいな声出せば

『は〜、うん』

あら家の千春俺が帰ってきてても、たいして喜んでもいないな、寂しい思いになる、これトーンでね、

(うん)

で決まるのよ、

(う～ん、ふふふ)

『そういえばそうだ』

「ふふふ」

う～ん、そいであいうえおかきくけこドレミファソラシドこれを併せて13分毎日、3ヶ月で変わります。

(うふふふ)

だ、俺初めてでしょ

『はい』

私の、昔から眼を見て喋りなさいって言われているでしょ、

『そうですね』

何秒見ればいいと思う

(うん)

何秒

(何秒)

公式があるのよ

『はあ、ずーっと見てたらいけない』

(そうですか、私ず～と見てますよ)

『勘違いされるから』

ああそう、それご存じならいい、あなたのような声綺麗な方に10秒も男見られてみてご覧なさいよ、千春俺に惚れてんのかなてなるよ n,

『ははは』

それは女性も悪いのよ、

この談話例は、染五郎が例によって客に戯れ言を言う場面である。染五郎は見知らぬ客を和ますために、また自分の話術に引き込むために、こうした言葉遊びを必ずする。そうしながら、相手がどのような人物か値踏みするのだ。この対話例における染五郎の千春に対する戯れの発話(下線部h, i, j, l, n)や、さっき聞いたばかりの信太の名前を忘れてることを露呈する発話(下線部m)は、語りをもつばら千春に向けて行われていることを示している。信太は染五郎とその日初めて顔を合わせたわけであるから、こうした染五郎の戯れは理解不能であるばかりか、認めがたいものであったであろう。そうした表情がその時の信太の顔面に見て取れたので、私は彼にこれは染五郎が客の誰にでも言う戯れ言であることを分からせようと「誰にでも言うから大丈夫、ははは」(下線k)のような取りなしをしている。

染五郎の戯れ言の続く間、私の笑い声や千春の困ったような受け答えは見られるが、信太は一貫して沈黙している。この沈黙は理解不能の語る意志無き沈黙であり、信太の馴染みのある生活世界に現れた異質で見慣れぬ染五郎の他者性を象徴する沈黙である。そしてこの間、染五郎と信太の間には対話は不成立で、新たなリアリティの共同構築も見られなかったということだ。そして、ここでは対話は不首尾に終わり、染五郎のモノログのみが展開している。

#### IV 対話主義の自己概念

主観客観二元論を超えるためのこれまでの様々な試み、例えばフッサールの意識・志向性・現象やハイデッガーの現存在の世界理解、さらにはプラグマティズムのパースペクティブアル實在論なども、デカルト的自己と同じように、意識の地平の中心に自己があり、意識体験は連続的であると暗黙の中に仮定している。対話的方法はこれらの自己(意識・現存在)概念を否定し、全く別の自己概念を提起する。対話的方法は次の二つの前提から出発する。それは①意識の地平における自己の周辺性と意識の共同主観性、と②意識の離散性という原理である。

(1) 自己は意識の地平の中心にあるのではない。意識は共同主観的であり、対話者たちがコミュニケーションの過程で構成する。しかも、コミュニケーションごとにその意識は少しずつぶれていく。コミュニケーションは言語を中心としたシンボルによって媒介されるので、意識はシンボルによって分節化された世界像を前提にして進められ、コミュニケーションの中でその世界像も少しずつ修正され変容する。シンボルの中で特に言語が重要だが、言語を媒介にする限り、意識は過去のその言語使用者たちが言葉に込めた外延や内包の制約を受ける。意味は言語共同体の中で蓄積され、言語使用者はその意味作用から自由ではあり得ない。このように、意識の地平はコミュニケーションする自己と他者を含むだけでなく、過去の言語使用者たちをも含む言語共同体によって構成され、単一の自己がその中心で意識を編成する権能を与えられているわけではない。これは認知的な意味だけでなく、情緒の意味や意志の意味についてもいえる。言い換えると、認識も情緒も意志も社会的にまた歴史的に構成される。未だ自己以外が理解できない新たな概念、あらたな感情表現、新たな意志内容を生み出した瞬間には、その意識については自己が中心にいることはできるが、コミュニケーションによってそれを他者に伝えるやいなや、他者によるその意識作用に対する介入が始まり、それらは直ちに共同主観化され、特定の自己はその意識の地平の中心的位置から放逐される。

(2) 意識は連続的ではなく、意味や感情や意志は一塊の経験として現れる。人は時間を連続的ではなく離散的に生きる。生活経験はライフヒストリー法が想定したような連続した時間の流れとしては経験されていない。経験はあるテーマ毎に結束性をもち一塊のリアリティとして経験され、別の経験は時間的にその経験と同時進行であってもそれらと決して同じリアリティの平面を構成することはない。ある人のことを想う経験は食事や仕事の時間でもそれらの経験とは切り離されて塊として意識される。また、語りの中で、人はその人を想う経験を食事や仕事の話と混ぜて連続的に話すこともない。

自己の中には複数のI-me セットが存在する(H.J.M.Hermans, H.J.G.Kempen, & R.J.P.van Loon, 1992)。me は内なる想像上の他者で、それぞれのme の作者たるIはそれぞれの認識の共同体を代表する他者である。つまり、自己は、それぞれの自己物語を語り、他のme と対話し、他のIの世界観に同意したり否定したりする、複数のI-me セットから構成されている。だから、特定のI-me セットが自己の経験を編集しているときに、一つの纏まりをもった意識が形成され、それは無時間的に現れる。そして別のシーンで、別の特定のI-me セットが登場すると、先の意識の塊との間に不連続がみられ、世界が離散的に経験される。

これらの対話性原理は例証に用いた前述のトランスクリプトにも現れている。まず、談話例(1)は私の自己も染五郎の自己も意識の地平の中心になく、意識が私と染五郎によって共同主観的に構築されるさまを如実に示している。また、談話例(2)は談話例(1)の数分後に信太夫妻が椿樹園のハウスに登場してからのシーンだが、談話例(2)では談話例(1)とは話題が一変し、全く異なるI-me セットが染五郎の自己の中に登場していることを示すものだ。そして、その語りは染五郎にとっては異質でなく、私や信太夫妻にとっては異質なのだが、ここで肝心な点は、プロデューサーの話題で共同構築された意識とこの染五郎の戯れのモノログで表現される意識との間に、連続性がないということだ。世界の経験は塊であり、ある経験の塊と別の経験の塊は離散的に現れる。時間は等速的に経過せず、塊をもった経験の中では停止し、別の塊に移行するときに動き出す。ある出来事の経験はそれを取り巻く人物、背景に焦点化されているときには停止し、行為が現れたときに動き出す。出来事についての語りも、登場人物や背景の描写が為されるときには時間的に停止し、塊となって表現される。しかし、別の行為が語られ筋が展開するときには時間が現れる。

対話的自己は共同主観的かつ離散的に世界を経験しそれを対話の中でそれぞれのシーンでの対話相手と共著的に表象する。塊となった経験は結束性をもった物語へと共著的に変換されるのだ。それに失敗すると自己は独話し相手方は語る意志無き沈黙で答える。塊をもった経験は共著的表象化を実現できず、音声か止むと共に跡形もなくなる。同意と不同意、理解と無理解、語る必要無き沈黙と語る意志無き沈黙、あるいは汝と他者という二つの相反する要素が談話の中には必ず存在する。対話として実現する談話もあれば、独話に終わる談話もある。インタビューの中でも同じことが起こり、ある談話は対話として新しいリアリティを構築するが、別の談話は独話に終わって、相互主観的リアリティは形作られない。

## 参考文献

- Barresi, J., 2002, "From 'the thought is the thinker' to 'the voice is the speaker' : William James and the Dialogical Self", *Theory & psychology*. 12(2):239~250.
- Barresi, J., & T.J.Juckes, 1997, "Personology and the Narrative Interpretation of lives", *Journal of Personality*. 65(3):693~719.
- Бахтин, ММ, *Проблема поэтики Достоевского*, издание, второе, переработанное и дополненное. Советский писатель, Москва, 1963. 新谷敬三郎訳「ドストエフスキイ論」冬樹社, 1974年
- Бахтин, М.М., 1976, *Проблема текста*, Вопросы литературы No.10. 「テキストの問題」新谷 敬三郎他訳, 『ことば 対話 テキスト』新時代社 193~239頁。
- Crapanzano, V., 1990, "On Dialogue" in T.Maranhan (eds.) *The interpretation of dialogue*, The University of Chicago Press, Chicago. pp269~291.
- Gillespie A., 2009, "Returning to James: A Methodological Challenge" *Psychology & society*.2:33~35.
- Gurevitch, Z.D., 1988, "The Other Side of Dialogue: On Making the Other Strange and the Experience of Otherness", *ASR*. 93(5):1179~99.
- , 1990, "Being Other: On Otherness in the Dialogue of the Self", *Sutudies in Symbolic Interaction*,11:285~307.
- , 2000, "Plurality in Dialogue: A Comment on Bakhtin", *Sociology*. 34(2):243~263.
- Hermans, H.J.M., 2001, "The Dialogical Self: Toward a Theory of Personal and Cultural Positioning", *Culture & Psychology*. 7(3):243~281.
- Hermans, H.J.M., H.J.G.Kempen, & R.J.P.van Loon,1992, "The Dialogical Self: Beyond Individualism and Rationalism", *American Psychologist*.47(1):23~33.
- James, W., 1890, *The Principles of Psychology Vol I*. Henry Holt and Company, New York.
- Linell, P., 2003, "What is Dialogism: Aspects and elements of a dialogical approach to language, communication and cognition" Lecture at Växjö University
- Makaremi, C., 2008, "Engaging with Silence: Interview with Vincent Crapanzano", *Altérités*, 5(2):33~45.
- Marková, I., 2003, "Constitution of the Self: Intersubjectivity and Dialogicality", *Culture & Psychology*. 9(3):249~259.
- 宮本常一, 1984, 『忘れられた日本人』, 岩波書店